

針と糸の民「モン族」の暮らしと織物の教材化に関する研究

柴 静子 日浦美智代 一ノ瀬孝恵 高橋美与子
佐藤 敦子 木下 瑞穂 高田 宏

1. はじめに

高等学校家庭科新学習指導要領（2009年告示）においては、共生社会の実現の視点から「生涯を通して家族や家庭の生活を支える福祉や社会支援について理解させ、家庭や地域及び社会の一員としての自覚をもって共に支え合って生活することの重要性について認識させる」という内容が新たに組み込まれた。国際的視点で共生社会の実現を考えた場合、その取り組みの一つとして、発展途上国への支援及び発展途上国から得る学びがある。これまでも日本の家庭科教育では、学習指導要領の理念「生きる力」の育成に基づき、生活の向上を目指し、主体的に生活課題を解決する能力を養うことを目標としてきた。生活能力の育成は、発展途上国でも貧困からの克服のために必要とされている課題である。共通の課題を持つ者として、発展途上国との双方向の関係について授業化することは共生社会を考える上で意義深い。

本研究では発展途上国の民として、ラオス、タイ、ベトナムなどの東南アジアや中国の雲南省などの高地に住む山岳少数民族である「モン族」を取り上げるが、とりわけラオスに住むモン族に焦点を当てたい。彼らは、かつてベトナム戦争とその後のラオスの内戦に巻き込まれた悲劇の民族として知られているが、その一方で「針と糸の民」といわれるほど刺繍の技術に優れており、現在でも自らの民族衣装を作るに際し、繊維を取り出すところから始めて、全て伝統的な手作業で行っている人々も少なからず存在する。

一方日本では、近年、衣生活の中で化学繊維が台頭し、伝統的な繊維を使用した衣類の割合は低下し、また手織りの技術は衰退している。そのような中で、モン族の手仕事に依存した衣生活を学ぶことは、日本の伝統的な衣生活文化の重要性を再認識し、これからの生活に役立つ力を養うきっかけとなると思われる。

以上を踏まえ、被服領域に共生社会の視点を取り入れ、モン族の布や生活について学び、また援助できることはないのか考えさせる、双方向の授業モデルを開発することを本研究の目的とした。授業では、衣生活において国際協力の視点からアプローチすることにより、生徒に幅広い視野で自身の生活をとらえさせること、生徒が途上国の生活向上の策を考えると同時に自らの生活の向上を考えるという発展的な学習へ結びつけること、さらに、モン族と日本の伝統的な衣生活文化に対する親しみや重要性に気づかせることに重点を置いた。なお、実験授業は、広島大学附属中・高等学校の高1の2クラス並びに附属福山中・高等学校の高1の2クラスで実施したが、紙幅の都合上、本稿では前者の経過と結果を取り上げるに留めて、後者については別の機会に発表したい。

2. 授業を構成する中心的な要素となった民族衣装と映像「アジア染色紀行」

(1) モン族の民族衣装である巻スカート

ラオスのモン族の民族衣装は、芸術的な美しさをもっている。とりわけスモッキングを施した腰布に細かなプリーツ布をつないだ、裾幅が5メートル以上もある巻きスカートは、手織りの麻を素材として、クロスステッチ刺繍やアップリケ、自生する藍による藍染とろうけつ染めが美しい。本研究では、このようなスカートの実物を10点ほど収集し、授業において生徒に触れさせることにより、人類が誕生して以来、衣生活の中心として深い関わりを持ってきた天然繊維である麻と、それを飾る刺繍と染色について、感覚を敏感にし、それらのもつ意義について考えさせた。

(2) NHK番組「アジア染色紀行—針と糸の民〜ラオス・モン族の刺しゅう〜」の視聴

モン族の暮らしと衣服・布について理解を深めさせ

表1 「針と糸の民『モン族』の暮らしと織物」の学習指導案

日 時 2009年12月4日(金) 5・6限 13:20 ~ 15:10 場 所 広島大学附属高校 被服教室
 学年・組 高等学校1年4組 40名(男子19名, 女子21名) 授業担当 日浦美智代
 単 元 家庭基礎 衣生活を見直そう 一針と糸の民「モン族」の暮らしと織物を取り入れて—
 目 標

1. 衣生活文化に関心を持ち, 民族衣装の社会的・文化的側面を知る。
2. 生活文化の背景にある人々の願いや知恵について考える。
3. 被服材料の種類と特徴について科学的に理解する。
4. 人間と被服との関わりについて考え, これからの衣生活を営む力を養う。

指導計画: 第1次 生活文化をみつめる(1時間)

第2次 モン族の暮らしと織物(3時間) 一本時はその2・3時間目

(単元設定の理由) これまで生活文化は時代背景や社会の影響を受けながら変容してきた。日本の伝統的な衣服といえば和服である。今日, 生活スタイルの変化にともない, 生活着として和服は洋服に変わっている。このような変化にともない, 化学繊維が多く利用されるようになり, 天然繊維を伝統的な手法で作りに出した衣類の割合は低下し, また手織りの技術は衰退している。一方東南アジアの高地に住む「モン族」は, 「針と糸の民」といわれるほど刺繍の技術に優れており, 現在でも自らの民族衣装を作るに際し, 繊維を取り出すところからすべて伝統的な手作業で行っている。モン族の刺繍は家庭生活の中で, 家庭や地域の中で母親から娘へと受け継がれてきた。その生活文化に関心を持たせて, 生活文化の背景と人々の願いと生活の知恵について考えさせるとともに, 日本の伝統的な衣生活文化に対する親しみや重要性を再認識させたい。生徒は前時にNHK番組「アジア染織紀行・針と糸の民〜ラオス・モン族の刺しゅう」を視聴し, モン族の生活について学んでいる。本時は, モン族の布を使った生活に役立つ小物作りを通して, 先人によって作られてきた繊維によって, 我々の生活が成り立っていること, 生活文化と自分との関わりをより深く考え, 科学技術の進歩が生活文化をどのように変えたか理解させたい。他国の衣生活を学ぶことによって発展途上国の生活改善を考えると同時に自らの生活改善を考えるとところまで発展的な学習に繋げたい。

本時の題目 モン族の暮らしと織物

- 本時の目標 (1) 生活文化は時代や地域, 社会状況などにより多様であり, 生活文化の背景にある人々の願いや知恵について考える。
- (2) 繊維の特徴を科学的に理解し, 日本における繊維の発展の歴史を知る。
- (3) 人間と被服との関わりについて考え, 心豊かな衣生活文化のあり方について考える。

本時の学習過程(2時間)

学習内容	指導内容・学習活動	指導上の留意点・評価
(導入) 本時の目標	○本時の学習内容を知る。	○日本の衣服が多様に変化してきたことに関心を持ち生活文化の背景について考えようとしている。
(展開) 繊維の特徴 繊維の歴史	○我々の衣生活を取り巻く衣服の繊維の特徴を科学的に理解する。 ○日本における繊維の発展の歴史を理解する。	○我々の衣服は何からできているか考える。 ○生活文化は社会状況や価値観の変化によって変化するものであることに気付く。
モン族の布の特徴 モン族のスカート モン族の刺繍が伝えるもの	○モン族の布の特徴を理解し, モン族のスカートができるまでの工程を理解する。 ○モン族の刺繍から伝わる生活文化の背景と生活の知恵と人々の願いについて考えさせる	○モン族の人々の生活の知恵と文化の伝承, 刺繍に込められた家族に対する思いを理解する。
モン族の布を使って「貝の口」を作ろう さまざまな衣生活文化	○モン族のろうけつ染めの布で小物作りをする。 ○先人によって作られた繊維によって, 我々の生活が成り立っていること, 地域や家庭で生活文化が伝承されていることに気付く。	○小物作りから伝統的織物を形に残していくことの大切さに気付く。 ○これから豊かな生活を営むために必要な生活文化の背景や変化を理解している。
衣生活と環境問題	○科学技術の進歩と環境問題, これからの生活文化について自分とのかかわり, 改善すべき衣生活の取り組みについて考える。	○衣生活とどのように関わっていく必要があるか自分との関係を考える。
これからの生活文化(まとめ)	○生活文化は主体的につくりだすものであることを認識する。	
備 考	使用教科書: 家庭基礎(大修館書店) 映像資料: NHK番組「アジア染織紀行・針と糸の民〜ラオス・モン族の刺しゅう〜」(1996年6月13日放映NHKBS 2)	

表2 NHK番組「アジア染織紀行・針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう～」の内容

(ナレーション) アジアの国々では、今なお伝統的な染織の技術が生きています。染め、織り、刺繍、そこには暮らしや自然が生き生きと映し出され、民族の歴史や誇り、そして知恵がこめられています。

(針と糸の民 ～ラオス・モン族の刺繍～) ラオス北東部ホウパン県、ベトナムと国境を接する山岳地帯です。

(サムヌア市場の風景) ラオスには、およそ100を超える民族が暮らしています。ホウパン県の西部、サムヌア市場に集まる山岳少数民族、その中で、ひととき華やかなスカートで目を引くのは、モン族です。色とりどりの刺繍で飾る、針と糸の民。中でも、ろうけつ染めの青いスカートを身につけているのは、ブルーモンと呼ばれる人たちです。

(吉田氏) モン族の村を訪ねることにしました。市場のある町から車で2時間、さらに山道を歩いて2時間かかります。

(モン族についての説明) 精霊界を崇める山の民、モン族。しかし、もとは中国の長江中流域で水田を耕す農耕民族でした。漢民族に追われ、中国南部の雲南省やベトナム、ラオスの山奥に逃れてきました。(ホアイファン村の風景) ホアイファン村、45家族、331人が暮らしています。山の木を切って燃料とし、川の流れてわずかな電気を起こし、焼畑で米を作る自給自足の生活です。軒下では女たちが刺繍に精を出します。村をまとめる村長さん(ソブンさん)を訪ねました。

(吉田氏) 女の人たちが、刺繍とかアップリケとかしていると聞いてやって来たんですけど、やっておられるんですか。

(村長) この村の女たちは手作りの衣装を着ています。布づくりからすべて自分たちの手でやるのです。衣装には思い思いの刺繍が入れられます。

針と糸を使い、衣装を美しく飾るモン族。襟元や裾など、衣服に施された刺繍は、悪霊の侵入を防ぐ、魔よけの意味をもつといわれています。衣装は民族を象徴します。特にモン族にとっては、中国を逃れ、生活する中で、お互いを確認しあう大切な手段でもありました。

(モン族のスカートをつくる) 女性たち自慢のスカート。刺繍とろうけつ染めを施し、丁寧に仕上げるため、一年に1、2枚しか作れないといえます。スカートの生地は麻から作られます。マンという麻の茎を十分に乾燥させ、皮だけを剥ぎ取って使います。麻の皮はさらに5ミリ程度に細く裂き、一本につなげていきます。一本ずつ先を裂いて紙漉り、繊維をしっかりとからませる細かい作業です。モン族独特の糸をつむぐ道具です。細く裂いた麻を、左手で調整しながらからめることなくつむいでいきます。つむぎ終わった糸は、3日かけて灰の汁で煮詰めます。こうして十分に色を抜いた後、水にさらします。(高機) 機は高機で、親戚と共同で使います。織りあがった布を、アイロンをかけるように、平たい石に使って伸ばします。こうすることで、布のごわごわした部分が取れ、表面が平らになって、ろうけつ染めの模様が描きやすくなります。(ロウ描き) ロウ描きには蜜蝋が使われます。下書きも無しに、四角いマスだけを目安に、正確な幾何学模様を描いていきます。銅版の隙間に蝋を溜め、線を引く道具はトゥッティヤといわれます。トゥッティヤは、線の太さによって使い分けられます。何百種類もある模様は、モン族の人々が代々受け継いできたもの。中国で水田を耕していた祖先たちの暮らしが記号化された模様の中に描かれているといえます。伝説によれば、漢民族に文字の使用を禁止された祖先が、ロウケツや刺繍の模様を暗号とすることで、民族の歴史や文化を子孫に伝えていこうとしたというのです。波模様は川、十文字は田のあぜ道を表します。今もその意味の分かっているものは、昔暮らしていた長江中流域の風景を描いたものです。

村の近くに布地となる麻を栽培していると聞き、子どもたちに案内してもらいました。村の人々は、周りの山から、布の材料をはじめ、様々な生活の糧を手に入れ、暮らしています。麻は、雨季に入る前に種をまき、3、4ヶ月で1メートルを超すまでに育ちます。ろうけつ染めで使う蝋は、山で採れる蜂の巣から作ります。そして、藍草も、山の斜面に自生しています。染めるときは、藍に灰の汁を混ぜて使います。布を染料に浸す時間はおおよそ30分。強く絞りすぎると、蝋ははがれてしまいます。また、日差しが強いと、蝋は溶けてしまいます。そのため、模様が崩れないように気を配りながら、風通しのよいところに干します。一日かけて、バケツ一杯分の染料が無くなるまで何度も染めを繰り返します。これを3日間行い、染め上げます。染め終えた布を煮込み、蝋を溶かすと、くっきりと文様が現れます。

ラオスの首都、ビエンチャン。その郊外に、今、新しいモンの村ができています。タイの難民キャンプから帰国した、モンの人々が暮らす帰還難民村です。1960年代に入って激化したラオス内戦。アメリカに支援された政府軍と民族戦線が戦ったこの戦争で、モン族も二派に分かれました。一つの民族が、敵と味方になったのです。戦いは、民族戦線の勝利に終わり、破れた政府軍側についていたモン族の人々は、故郷を追われました。言葉も通じないタイでの難民暮らし。そんな生活を支えたのが、女たちの針仕事でした。壁掛けやテーブルクロスなどを作り、現金に換えたのです。女たちが縫い上げた刺繍、そこにはかつての山での暮らしが描かれています。自ら体験した戦争の悲惨さや故郷を追われた悲しみ、モン族の女たちは、民族の新しい歴史を針と糸にこめ、再び語り継ごうとしています。5月。雨季に入るこの季節には、山は鬱蒼と緑に覆われます。日ごろ村で刺繍に精を出す女たちも、この時期になると山に入ります。焼畑にもみをまくのです。女たちは、小さな穴を開けて、もみをまいていきます。モンの娘たちは、どこへ行くときも、刺繍の道具を手放しません。畑仕事の合間にも針を動かします。刺繍が上手に出来るようになって、ようやく一人前とみなされるモンの女。娘たちは、3枚のスカートを縫い上げなければ結婚することが出来ないといえます。結婚するとき、花嫁は、自分で縫い上げたスカートと、母親に贈られたスカートを持って嫁ぎます。このスカートの枚数と出来具合が花嫁の器量とみなされます。スカートのすその部分を飾る刺繍は、細かい十字を並べるクロスステッチです。村の女たちは、空いた時間があると軒下に集まり、井戸端会議をしながら刺繍をします。スカートのすそ部分の模様は、人それぞれに異なります。趣向を凝らした模様は、女たちのセンスの見せ所です。「カタツムリ」「ミミズ」「ハナ」「糸つむぎ」「子孫繁栄」をあらわす刺繍の模様も、祖先から代々伝えられたものが基本となっています。大きな花は、かつての国の都、小さな花は稲穂を表すといわれています。こうした模様を思い思いに組み合わせ、好きな色で飾っていく、モンの女たちの表現手段です。藍の染料を作ったモウ・ヤンさんを訪ねてみました。早くに父親と夫を亡くしたモウさんは、母親と二人で暮らしていました。その母親も4年前に亡くなり、今は一人でこの家に住んでいます。スカートづくりの名人だった母親は、モウさんの

ために、いつもスカートを縫ってくれたといます。花嫁衣裳も、お母さんが用意してくれたものでした。モウさんは、それを形見として、大切にしまっています。モウさんは、死ぬときにはこのスカートをはいていたいといます。お嫁に行くとき、母親が作ってくれたスカートをはいて死ぬと、魂が故郷に帰り、再び母親に会える、モン族の古い言い伝えです。モン族には、古い言い伝えや昔話があります。中国からラオスへと放浪を続けてきた彼らにとって、最も大切なのは、一族の団結と新しい環境に慣れることでした。そのための知恵や教訓が、衣装や昔話という形で受け継がれているのです。スカートの上半分が出来上がりました。ろうけつ染めに鮮やかな赤い色の模様、この下に刺繍をした布を縫い付けます。スカートは、着る人の両腕いっぱい広げた長さの4倍の布で作られます。(村の女性： スカート何枚分かって？これで一枚分だよ。こうしてひだを寄せてスカートにするのよ。ひだが細かいほどきれいなよ。) スカートをしまうときは、そのつど、丸一日かけてしつけをかけ直し、プリーツが取れないようにして、大切に保管します。スーさんが見せてくれたのは、死に装束でした。

(吉田氏： これはどうするの？) (プー・スーさん： これは死んだとき、頭に巻くものだよ。これはノンジョン、死に枕だ。モン族の伝統で、娘が母親に送るんだ。娘です。一人は死んでしまって、今はこの娘だけ残っています。) (スーさんの娘： 死んだお父さんにも枕を作りました。お母さんが天国に行ったときに届けてもらうんです。) (プー・スーさん： もらったときはうれしくて、娘に豚の片脚を送ったよ。もらえないのはとても悲しいことなんだ。) 母親には娘から、そして父親には嫁から送られる死に装束。その数が多いほど、死後の世界を幸せに過ごせるといいます。

(ナレーション) スーさんは、娘にお礼の気持ちをこめて、孫が生まれたとき、ねんねこを作りました結婚、誕生、そして死。モン族の針と糸は、人生の節目を飾り、家族の絆を強く縫い合わせてきたのです。

新しいスカートが仕上がりました。(村の女性： この子がきれいに見えますように。みんなが好きになってくれますように。)

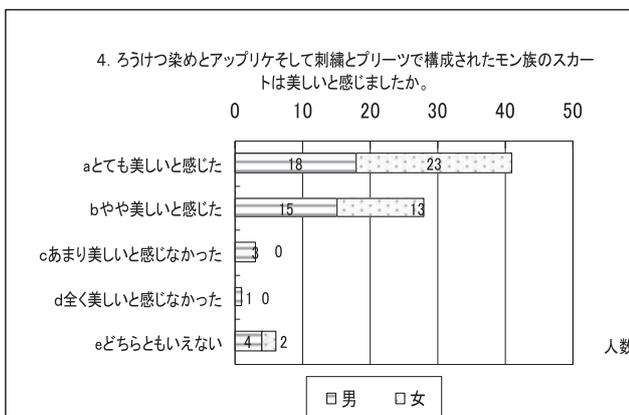
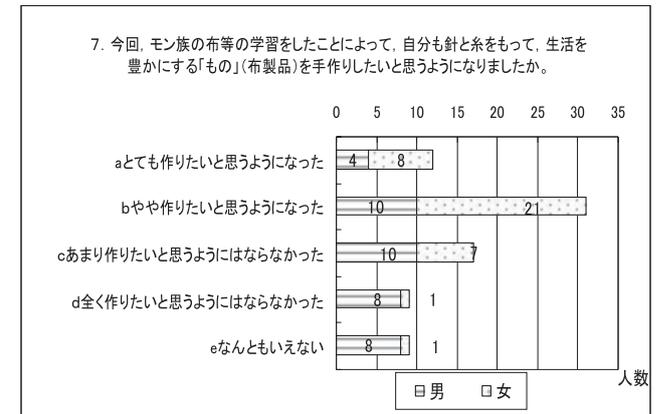
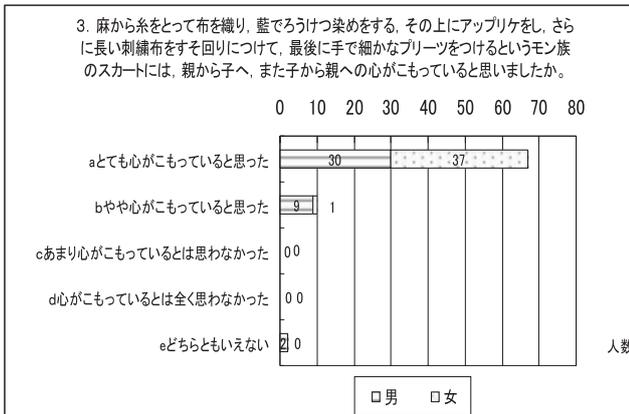
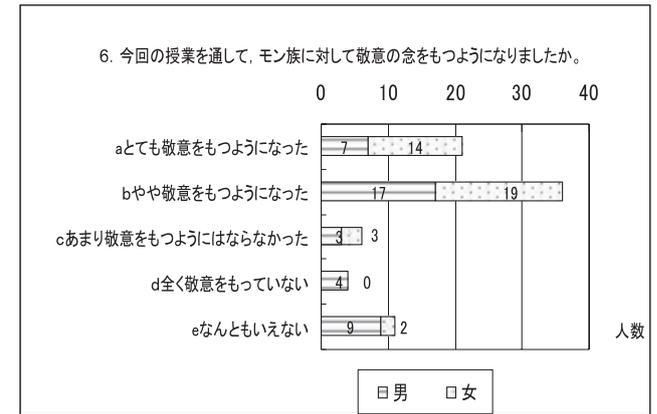
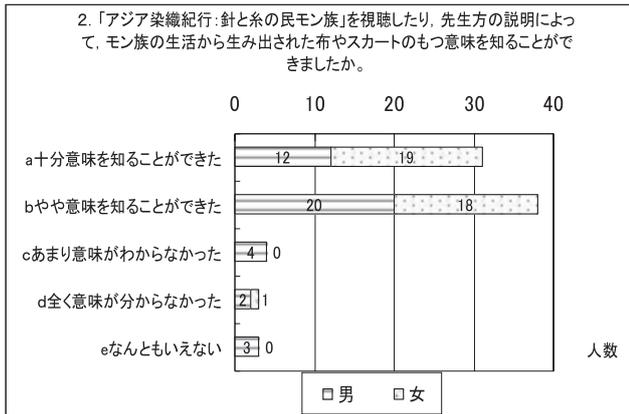
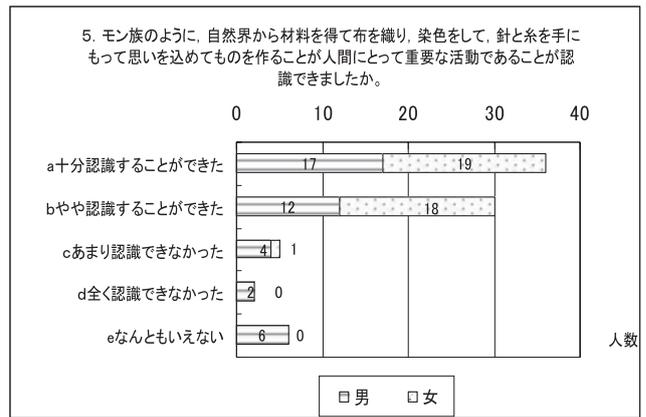
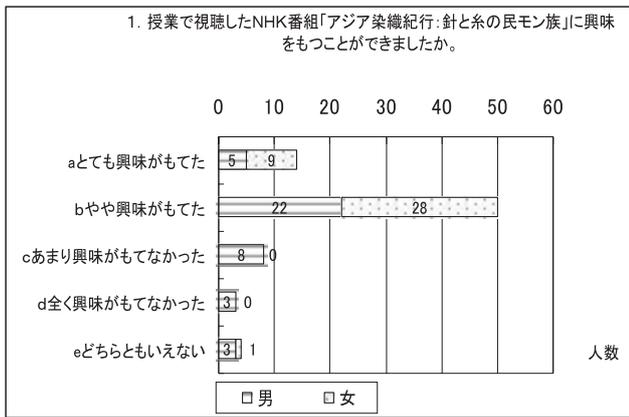
(吉田氏： 母親が娘に作るスカートの中に、精魂こめた刺繍がめいいっぱい、たくさんたくさんしてある。代々、おばあさん、その前のおばあさんから引き継がれていって、また今お嫁に行こうとする娘さんにも、そういったスカートの中に、また上着なりの刺繍の中に、アップリケの中に、またその子どもが今またそれを始めて、伝えていっている。やはり、針の中に三本の糸で、日本でいう刺し子のように、ひたすら細やかにアップリケとかステッチを、刺繍をやっていくというように自分が、生活そのものやないかと思うんやけども、それは、生活を越えて、たくさん刺繍を細やかにやるということが、彼女たちにとって、意味とかではなくて、美しいという意識で作っているということには感動させられると思います。)

(終了)

(NHK番組「アジア染織紀行・針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう～」, 1996年6月13日NHK BS 2で放映。吉田晃良氏 出演, 通訳 安井清子氏)

表3 アジア染織紀行」視聴後の感想 (自由記述・一部抜粋)

- ・すごく感銘を受けました。一つのスカートを作るのにこんなにも労力があるなんて……。刺繍で歴史を伝えようなんてすごいと思った。歴史の深さを感じました。こうやって代々受け継がれているだと思えばやっぱり伝統は大切にしないといけないなあと思いました。モン族の人々は戦争とかでつらいこともたくさんあっただろうに前向きに生きているなあと思った。
- ・モン族にとって衣服は単なる自己表現だけでなく、親子を結びつけ、さまざまな人生の節目に必ず関わっているとわかった。刺繍を中心に生活が回っているんだなあと思った。
- ・モン族は原料から作業工程、火おこしに至るまで全て手作業で行なっている。だからこそ、服は綺麗に美しく、そして、その人の唯一の大切なものになるのだと思う。
- ・モン族は工業とか生活の原点だと思った。
- ・自分の作るスカートの枚数や出来具合でその娘の器量をはかったり、その人の性格をはかたりする材料になり、また、昔は敵か味方かを判断する材料でもあったので、モン族にとって服は生活するうえで大変重要なものであり大切なものであることがわかった。
- ・既製品とは次元の違う話でした。既製品にはない作った人の愛情とかあたたかい気持ちが込められているのがわかった。ことばで伝えるのも大切だけど、母から子へ子から孫へと受け継いでいく形が伝統になっていることがわかった。
- ・自分の知らないところでいろいろな民族がいるという事実に感動した。それぞれの文化を大事に踏襲していくことが大切だと思った。
- ・死んだ母親の作ってくれたスカートをはいて死ぬと魂が故郷へ帰って、母親とまた会えるという言い伝えがある。スカートには特別な思いがあるのだなあと思った。死に枕、死に装束など死ぬまで針・糸と繋がっている。地味な生活ではあるけれど昔からの伝統を大切にしているので、村の文化が育っていいなあと思った。これだけ時間をかけて作れば衣服を大切にするだろう。
- ・衣服は民族を象徴するという言葉が一番何か感じるものがあつた。衣装はモン族にとって祖先や歴史、家族を繋ぐ重要な役割を果たすんだなあと思った。
- ・チャコペン代わりのトゥッテアという銅で作ったインクペンのようなつくりものがあつた。それも夫がつくる。なんでも自給自足。布を染めるのに……の実を使う。そういった昔の伝統的作り方。それがいい使い方だと発見した人がすごい。
- ・衣装一枚作るのがとても大変で時間がかかっていた。日本では服はカンタンに手に入るけど自分で作る姿を見て、服を大切にしないといけないと思った。
- ・あれだけのものを自給自足で入手し、作り上げて暮らせることがすごいと思った。今の日本では考えられない暮らし方だったので、その特徴とかがこれからもずっと受け継がれていくといいなあと思います。日本も独特の文化を大切にしていきたいです。
- ・モン族の人々は昔からのものを今も使いながらつくり、刺しゅうがとても細かくてすごいなあと思いました。すごく長い時間をかけて作っていて時間がとてもゆったり流れている感じがした。



調査日 平成22年1月6日、8日
 対象者 附属高等学校1年4・5組
 4組 男20人 女19人 (計39人)
 5組 男20人 女20人 (計40人)
 4・5組計 男40人 女39人 (計79人)

図1 事後アンケートの結果

るためには、巻スカートや藍染めのろうけつ布などの実物に加えて、映像資料の利用が不可欠である。今回は、大阪成蹊大学芸術学部の吉田晃良教授のご厚意で、氏が出演したNHK番組「アジア染色紀行―針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう」を提供していただいた。これは1996年6月13日に放映された50分番組であり、繊維造形作家である吉田氏を案内人として、自然界に宿る精霊を崇めて暮らすモン族の手織り麻の藍ろうけつ染め、さらに刺しゅうやアップリケを施して、細かなプリーツの巻スカートを作る様子をリアルに描いた優れた作品である。

3. 「針と糸の民『モン族』の暮らしと織物」の授業の実際

附属高等学校の1年生を対象としたモン族の授業は2009（平成21）年12月に4時間で実施した。1年4組は日浦美智代教諭が担当し、また1年5組は一ノ瀬孝恵教諭が担当した。

「針と糸の民『モン族』の暮らしと織物」の学習指導案は表1のとおりであり、麻、木綿、絹などの天然繊維と化学繊維の特徴と歴史についての内容と組み合わせ構成した。提示資料としては上記のNHK番組の他、タイの業者や日本のアジアショップを通して入手したモン族の伝統的な巻スカートなど、この民族の美しい織物や刺しゅうを感覚的に受容できる布類を準備した。さらに、モン族の藍染めろうけつ布で、「貝の口」を製作させ、蒙の布を生徒の日常生活に入れ込むことを考えた。

なお「アジア染色紀行―針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう」の内容については、表2を参照されたい。

4. アンケート調査と感想文に示された授業の効果

(1) NHK番組「アジア染色紀行―針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう」の効果

表3は、本実践の中核となったNHK番組「アジア染色紀行―針と糸の民～ラオス・モン族の刺しゅう」視聴後の生徒の感想文である。モン族においては、生活と衣服の文化が結びついていること、衣服を作ることによって相手に思いを伝えること、衣服が家族を繋ぐ重要な役割を果たしていることを生徒が学んだことが明らかになった。また、「家族のために時間をかけて物を作ることは私たちに失われていると思う」「民族意識や一着を大切にすることを私たちは失っている」「自分で手をかけて作ったものに対する愛着や価値は、安く手に入る既製品と違って深くなり、大切にするよ

うになる」「衣服に通じる社会性」「ものを大切にする気持ち、ありがたみ」など我々の日常生活の中で失いかけているものに気付いた生徒も多かった。

(2) 2010年1月に実施したアンケート調査から

図1は、授業後約1ヶ月を経た2010年1月に実施した授業効果を測るためのアンケートの結果である。7項目について尋ねたが、男女に若干の差は見られたものの全体的に興味・関心が高かった。特筆すべきは、98%の生徒が細かなプリーツをつけるモン族のスカートが親から子へ、子から親への心がこもったものであるとの思いを感じることができたことである。ビデオ視聴だけでなくモン族のスカート実物標本を多く準備することにより、一人ひとりが美しい刺繍やろうけつ染めを観察することができたことが良好な反応を示す要因になったと考えられる。

5. おわりに

本研究では、NHK番組「アジア染織紀行」のビデオ視聴を中心に授業を展開した。4時間という限られた時間の中で、映像資料を通してモン族の生活の中から生み出された布、自然界から材料を得て布を織り染色をして思いを込めて手作りすることの意味、スカートのもつ意味、刺繍に込められている思い、親から子へ子から親へ込められている思い、家族の絆についての認識が深まるように意図した。授業構成は、①ビデオ視聴②繊維の特徴の理解③繊維の歴史の理解④モン族の布の特徴の理解⑤モン族のスカート・刺繍が伝える願いや知恵の理解⑥製作実習⑦衣生活文化の認識とした。授業の中では、ビデオ視聴だけでなく、モン族のスカートなどの実物に実際に触れさせた。このことが高い授業効果を生む要因となった。

モン族の藍染めの布を用いて「貝の口」を製作したが、このような活動を取り入れたことにより、積極的に授業に参加でき、また製作することによって藍染めの布を観察し、手触りを感じ、ひいては自然と共存した文化の一端を感じることができたようである。

生徒は今回の授業を通して、自分が着ている衣服の持つ歴史、他の民族が着ている衣服の歴史を知ることにより、衣服とは多くの人々の長い時間と労力を経た工程によって出来上がっていること、その衣服にはさまざまな民族の願いが込められていること、衣服が人とのかわり目の大切さを伝えていることを学んだ。モン族の伝統的な手法による糸紡ぎ、藍染、刺しゅうが、現在まで大切に母から娘へ受け継がれていることの意味を深く認識できるこの教材は、現代のわたしたちの衣生活を考えるための導入でありたいと考える。